

東洋文庫
368

平凡社

今昔物語集

7

天竺部

池上洵一 訳注

いけがみじゆんいち

池上 洵一

昭和12年岡山県生。神戸大学文学部卒（昭35），
東京大学大学院人文科学研究科修了（昭41）。

現職 神戸大学文学部助教授。

専攻 日本文学（古代中世説話文学）。

主著 『今昔物語集一本朝部一』（共訳，平凡社
「東洋文庫」），『三国伝記』（三弥井書店「中世の
文学」）他。

今昔物語集 7 天竺部〔全2巻〕

東洋文庫 368

1979年12月20日 初版第1刷発行

定価 1,400円

訳注者 池上 洵一

東京都千代田区四番町4番地

発行者 下中 邦彦

印刷 東洋印刷株式会社

製本 株式会社石津製本所

発行所 郵便番号 102 東京都千代田区四番町4番地
振替・東京8-29639 株式会社 平凡社

© 株式会社 平凡社 1979 不良本は，直接小社サービス課で
Printed in Japan お取替え致します（送料小社負担）

凡 例

一 本書は『今昔物語集』天竺部全五巻の口語訳を二冊に分けたうちの第一冊であり、巻一・二が収載されている。

一 本書の口語訳の原本には、岩波書店版・日本古典文学大系『今昔物語集』の本文を使用した。

一 口語訳は、原則として意訳を避け、できるだけ原文に忠実であることを心がけた。ただ直訳のままでは現代文として成り立たぬ場合、あるいは文意をつくさなかったり、冗長にすぎたりする場合などには、たとえば句の順序をかえたり、主語・客語を補い、または省くなどして意識したところがある。俗語的表現は、恣意に陥ることを恐れ、なるべくこれを避けた。

一 本文中□により囲まれた空白部は、それに相当する部分が原本に欠脱していることを示す。「」内の語句は、原本に欠脱している部分を、原本と同文的な類話、あるいは確実な理由によって推定できる場合に限り、それらによって補ったものである。これらの典拠や理由は、それぞれの話末に注記した。

一 偈や経文の類は、原則として本文中では原文のまま読み方を示すにとどめ、その大意を注として話末に示した。

一 平易な用語に訳しにくい語句や、原文に問題があつて文意がわかりにくい部分、原文に明らかな誤謬がある部分などについては、話末の注記により簡略な説明を加えた。

一 話末の注記に引用する文献は、原則として、その話の出典もしくは最も近い類話を有する文献に限定した。

一 人名や地名は、反復して出てくるものが少なくないため、本書（天竺部、卷一・二）の末尾に一括し、「天竺部・固有名詞解説」として、簡略な説明を加えた。話末の注記とともに利用されたい。

一 各話の題名は、なるべく原文の読みくだしに近く口語訳するように努めた。

一 本書の製作にあたっては、国東文麿氏の明治書院版・校注古典叢書『今昔物語集』、講談社版・学術文庫『今昔物語集』の既刊分をはじめ、諸先学の研究に教えられるところが多かったが、なかでも山田孝雄・同忠雄・同英雄・同俊雄四氏校注の日本古典文学大系『今昔物語集』は、口語訳の原本としたばかりでなく、多方面にわたって絶大な恩恵をこうむった。特に記して深甚の謝意を表したい。

目 次

凡 例

卷第一 天竺

- 釈迦如来、人間界に宿り給う語 第一
- 釈迦如来、人間界に生まれ給う語 第二
- 悉達太子、王城に在って樂しみを受け給う語 第三
- 悉達太子、王城を出て山に入り給う語 第四
- 悉達太子、山に於いて苦行し給う語 第五
- 天魔、菩薩の成道を妨げようとする語 第六
- 菩薩、樹下に成道し給う語 第七
- 釈迦、五人の比丘のために法を説き給う語 第八
- 舍利弗、外道と術を競う語 第九

提婆達多、仏と諍い奉る語 第十

仏、婆羅門の都城に入つて乞食し給う語 第十一

仏、勝蜜外道の家に行き給う語 第十二

滿財長者の家に仏の行き給う語 第十三

仏、婆羅門の都城に入つて教化し給う語 第十四

提何長者、自然太子を得る語 第十五

鳶掘魔羅、仏の指を切る語 第十六

仏、羅睺羅を迎えて出家させ給う語 第十七

仏、難陀を教化して出家させ給う語 第十八

仏の叔母憍曇弥、出家し給う語 第十九

仏、耶輸多羅を出家させ給う語 第二十（全文欠脱）

阿那律・跋提、出家する語 第二十一

鞞羅羨王子、出家する語 第二十二

仙道王、仏の所に詣でて出家する語 第二十三

郁伽長者、仏の所に詣でて出家する語 第二十四（全文欠脱）

和羅多、出家して仏の弟子となる語 第二十五

卷第二 天竺

歳百二十に至って初めて出家した人の語	第二十六	一〇六
翁、仏の所に詣でて出家する語	第二十七	一一三
婆羅門、酔いによって意ならず出家する語	第二十八	一二六
波斯匿王、阿闍世王と合戦する語	第二十九	一二七
帝釈、修羅と合戦する語	第三十	一三二
須達長者、祇園精舎を造る語	第三十一	一三三
舍衛国の勝義、施によって富貴を得る語	第三十二	一三八
貧女、仏に糸を供養する語	第三十三	一三〇
長者の家の牛、仏を供養する語	第三十四	一三一
舍衛城の人、伎楽をもって仏を供養する語	第三十五	一三四
舍衛城の婆羅門、一めぐり仏を遶る語	第三十六	一三五
財徳長者の幼な子、仏を唱えて難を遁れる語	第三十七	一三八
舍衛国の五百の群賊の語	第三十八	一三六

- 仏の御父淨飯王、死に給う語 第一
 仏、摩耶夫人のために忉利天に昇り給う語 第二
 仏、病氣の比丘の恩に報い給う語 第三
 仏、卒塔婆を拝し給う語 第四
 仏、人の家に六日宿り給う語 第五
 老母、迦葉の教化により天に生まれて恩を報ずる語 第六
 婢、迦旃延の教化により天に生まれて恩を報ずる語 第七
 舎衛国の金天比丘の語 第八
 舎衛城の宝天比丘の語 第九
 舎衛城の金財比丘の語 第十
 舎衛城の宝手比丘の語 第十一
 王舎城の燈指比丘の語 第十二
 舎衛城の叔離比丘尼の語 第十三
 阿育王の女子の語 第十四
 須達長者の蘇曼女、十卵を産む語 第十五
 天竺で、香を焼くことにより、口の香を得る語 第十六

迦毗羅城の金色長者の語	第十七
金地国の王、仏の所に詣でる語	第十八
阿那律、天眼を得る語	第十九
薄拘羅、善報を得る語	第二十
天人、法を聞いて法眼淨を得る語	第二十一
常に天蓋を具する人の語	第二十二
樹提伽長者の福報の語	第二十三
波斯匿王の娘善光女の語	第二十四
波羅奈國の大臣、子を願う語	第二十五
前世に不殺生戒を守った人、二國の王に生まれる語	第二十六
天竺の神、鳩留長者のために甘露を降らし給う語	第二十七
流離王、釈種を殺す語	第二十八
舍衛國の群賊、迦留陀夷を殺す語	第二十九
波斯匿王、毗舍離の三十二子を殺す語	第三十
微妙比丘尼の語	第三十一
舍衛國の大臣師質の語	第三十二

天竺の、女子は父の財宝を伝えられぬ国の語 第三十三

畜生百頭を具する魚の語 第三十四

天竺に異形の天人降る語 第三十五

天竺の遮羅長者の子、閼婆羅の語 第三十六

満足尊者、餓鬼界に至る語 第三十七

天竺の親子二人の長者、慳貪の語 第三十八

天竺の利群史比丘の語 第三十九

曇摩美長者の奴、富那奇的語 第四十

舍衛城の婆提長者の語 第四十一

天竺部・固有名詞解説

解説

二五

二五

二六

二六

二六

二六

二七

二七

二七

二八

二九

今^{こん}
昔^{じやく}
物^{もの}
語^{がたり}
集^{しゅう}
7

天^{てん}
竺^{じく}
部^ぶ

池^{いけ}
上^{がみ}
洵^{じゆん}
一^{いち}
訳注

卷第一 天竺

釈迦如来、人間界に宿り給う語 第一

今は昔、釈迦如来は、まだ仏におなりにならない時、釈迦菩薩と申して、兜率天の内院という所に住んでおいでになった。ところが、人間界に生まれ出ようとお思いになった時、五衰を現わされたのである。その五衰というのは、一つには、天人はまばたきをすることがないのに、まばたきをする。二つには、天人が頭上にいただいている美しい髪飾りの花はしぼむことがないのに、しぼんでしまう。三つには、天人の衣服には塵が付くことがないのに、塵や垢が付く。四つには、天人は汗をかくことはないのに、脇の下から汗が出る。五つには、天人はもともと自分の座を変えずにいるものなのに、本来の座にいうとはしないで、どこでも出くわした場所にすわってしまう。この五つの衰相のことである。

その時、他の天人や菩薩たちは、釈迦菩薩がこの衰相を現わされたのを見て不審に思い、

菩薩に、

「私たちは、今日、菩薩がこの衰相をお現わしになったのを拝見して、身体はふるえ、心は動転しております。願わくは、私たちのためにこの衰相をお現わしになったわけをお話し下さい」

と申し上げた。菩薩は天人たちに、

「よく知るがよろしい、すべての現象は決して永久に不変なものではなく、流転してやまないものであるということを。私はこれからまもなくこの天上界の宮殿を捨てて、人間界に生まれることでしょう」

とお答えになった。これを聞いて、天人たちの歎きは一通りではなかった。

さて、菩薩は、人間界に生まれるのに、誰を父とし、誰を母としようかとお思いになって、人間界をご覧になったが、迦毗羅衛国（カピラエ）の浄飯王（じやうはん）を父とし、摩耶夫人（マヤフじん）を母とするのがよいとお心を定められた。そこで、癸丑（みづのとうし）の年の七月八日、摩耶夫人の胎内にお宿りになった。夫人が夜おやすみになっている時の夢に、菩薩が六牙（ろくげ）の白象（びやくぞう）に乗って大空からやって来て、夫人の右の脇から身体の中にお入りになったと見えたとのである。それははっきりとすき通って見え、まるで瑠璃の壺の中に物を入れたようだった。夫人は夢から覚めて、浄飯王のところに行って、この夢をお話しになった。王はその夢の話を聞いて、夫人に、

「私もそれと同じ夢を見た。この夢がなにを意味するのか、自分だけでは決められまい」とおっしゃって、さっそく善相婆羅門ぜんそうばらもんという人を招き、美しく香り高い花やさまざまなご馳走で供養して、夫人の夢の意味をお尋ねになった。すると、婆羅門は王に申し上げた。

「王妃様がお腹に宿していられっしゃる太子様は、数々のまことに立派な相を備えておいでです。詳しくはお話しできません。今は王様にその大略をお話ししましょう。この王妃様のお腹の中の太子様は、きつと光りかがやく釈迦の種族とおなりでしょう。お生まれになる時には、非常な光明をお放ちになりましょう。梵天ぼんてんや帝釈天たいしゃくてん、それに諸々の天衆もろもろがみな敬い尊ぶことでしょう。これはこの太子様がきつと仏におなりになる、その瑞相ずいそうなのです。もし出家なさらないならば、転輪聖王てんりんじょうおうとなって、全世界に七宝しちぼうを満たし、千人の皇子をお持ちになるはずですよ」

その時、王はこの婆羅門のことばを聞いて大変にお喜びになり、金・銀・象・馬や車など、いろいろな宝を婆羅門にお与えになった。また、夫人もいろいろな宝をお施ほどこしになった。そこで、婆羅門は王と夫人がお施しになった宝をいただいて帰って行った、と語り伝えているとのことである。

一 癸丑の年の七月八日「癸丑」の干支は『過去現在因果経』その他の仏伝經典には見られない記

事であるが、『歴代三宝紀』や『法苑珠林』その他の中国の仏教史書の仏伝では、むしろ通説化して用いられている。本話の干支はこれを反映したものであろう。なお託胎の月日については、四月八日・七月七日・七月十五日の三説があり、七月十五日が通説となっていたらしいが、本話のいう七月八日説も室町時代の『釈迦物語』に見えるので、何かしかるべき典拠があったのであろう。

二 転輪聖王 天から輪宝を感得し、これを転じて天下を感伏治化するという王。全世界を支配する理想的な帝王。転輪王。

釈迦如来しやかにょらい、人間界に生まれ給う語こと 第二

今は昔、釈迦如来の御母摩耶夫人まやふじんは、父の善覺長者ぜんかくちやうと一緒に、春なお浅い二月八日ふにふちやう、嵐毗らんぴ尼園にという林園の無憂樹むいうじゆの下へお出かけになった。夫人はその林園にお着きになり、美しい宝で飾った車から下りて、まずいろいろなすばらしい瓔珞えいらくをまとして身体をお飾りになり、無憂樹の下へとお進みになった。夫人のお供に従う侍女は八万四千人、彼女たちが乗って来た車は十万であった。大臣・公卿をはじめ諸々の役人たちもみなそれぞれにお仕えしていた。その木は上から下まで一様に葉が垂れ下がって、枝に垂れ広がっていた。半ばは緑で、半ば